

大学院博士課程体験記⑳

山口 健史 (やまぐち たけし) 小児科



「一生で1番勉強したと思える1年間にしなさい。それは一生の自信になります」という予備校講師の言葉を、自分は大切にしています。自分の人生で、3浪目のときほど勉強したときはなく、大学院時代ほど研究に打ち込んだ4年間はなく、いづれもかけがえのない時間です。

おそらくみなさんと同じで (?), 大学時代は部活とバイトと、毎日飲んでた記憶しかありませんが、医者になってからは臨床がおもしろすぎて、重症患者さんや超未熟児が生まれてからは月の半分くらい病院に泊まり込む生活でした。臨床にそれなりに自信を持てるようになった医者6年目ころに、日本小児内分泌学会に参加しましたが、遺伝子の話ばかりで全く理解できず、すごく悔しい思いをしました。それ以降、遺伝子の勉強をしたいと考え、小児科内分泌班に入れてもらいました。ピペットを握ったこともなく、論文を1文字も書いたことがないまま、大学院に入学したのは医者8年目、35歳のときです。

このとき、決意したことがあります。「一生で1番研究したと思える4年間にする」です。大学院入学が遅く、アカデミア・リサーチャーとしてやっていくには相当に出遅れていて、この4年間がラストチャンスであることを自覚していました。また、能力はボンコツでも、根性だけは誰にも負けないので、ひたすらがんばるしかないと考えていました。振り返ると、4年間でシンデレラボーイ(0時まで帰宅)だったのは数えるほどしかなく、悔いのない大学院生活でした。大学院時代の基礎研究と臨床研究を1つずつ、紹介させていただきます。

Targeted Next-Generation Sequencing for Congenital Hypothyroidism With Positive Neonatal TSH Screening

前チームの田島先生に資金面と研究の方向性を、現チームの中村先生に次世代シーケンサーの立ち上げからパネル設計、解析までご指導頂き、まとめました。この論文の要旨は、先天性甲状腺機能低下症の網羅的な候補遺伝子解析でのバリエーション同定率は167名中111名でした。また、「異なる遺伝子に複数のバリエーションを同定した症例 (oligogenic)」が18.0%おり、1つのみバリエーションを同定した症例 (monogenic) 35.9%よりも重症の傾向があり、oligogenicという新たな病因論を示すことができました。この論文は、2020-2021年の本雑誌の引用率上位10%に入りました。本研究では、バリエーションの病原性の確認のため、患児のみならず、かなりの数の親御さんにも、土日や時間外を関係なく来院してもらい

採血させて頂きました。この場をかりてご協力頂いた患者様とご両親、さらに採血や解析のご助力を頂いた内分泌班の同僚に心より感謝申し上げます。

Hypoglycemia in type 1A diabetes can develop before insulin therapy: A retrospective cohort study

この研究は、多数の専門書の執筆もされている、都立小児医療センターの長谷川行洋先生との共同研究です。要旨は、1型糖尿病患者87名の後向きにコホートで、「インスリン開始前に低血糖」を認めた患者が6名いました。この低血糖の特徴は、食後性低血糖であること、糖尿病発症早期に起こることを明らかにしました。この研究では、帯広や釧路へトンボ帰りで赴いて徹夜でデータを集めたりしたのも良い思い出で、また、都立小児病院の先生にはすこぶる親切にご指導頂き、出会いの大切さを学びました。

現在は、真部教授や岸教授にご高配頂き、環境健康科学研究教育センターで疫学を勉強させて頂いています。ここではビッグデータを扱っていますが、大学院時代の小さなコホート研究の経験がとても役立っています。大学院卒業からまだ1年半ほどですが、自分のやりたい研究を計画して科研費(若手)を応募して採択されたり、基盤研究や、厚生省、環境省の委託研究の分担として、ご高名な先生方に混ざって班会議に参加したり、日本医師会医学研究奨励賞を受賞したりと、学位を取得するとこんなにも新しい経験ができるものかと、楽しく刺激的な毎日を送っています。振り返ると、大学院はスタートラインであり、多くの素晴らしいメンターや同僚に支えられながら、がむしゃらに4年間を過ごしたことが現在につながっています。今後も、感謝の気持ちを忘れず、1年1年を全力で取り組んでいきたいと思えます。



医師会奨励賞受賞時の写真